特別インタビュー

大学スポーツ振興の社会的意義

――大学スポーツ協会（UNIVAS）の設立

大学スポーツ協会会長
鎌田　薫
（日本私立大学連盟 前会長、早稲田大学 前総長）

【聞き手】
山田 健太●専修大学文学部教授
長野　　香●立教学院広報室長

大学における各種スポーツは学生の課外活動として位置付けられ、独自に発展してきた。日本のスポーツ界を支える大きな存在の一つといえるが、例えば日本中学校体育連盟（中体連）や全国高等学校体育連盟（高体連）があるにもかかわらず、大学スポーツには同様の組織が存在しない。こうした状況を受けて、2018年夏には日本版NCAA設立準備委員会が設立されて議論を重ねた結果、大学スポーツを横断的に統括する組織として「一般社団法人 大学スポーツ協会」（通称UNIVAS）が2019年3月1日に発足。スタート時の会員数は200大学、31団体となっている。

UNIVASの狙いや概要、将来構想などについて、UNIVASの鎌田薫会長にうかがった。

日本の大学スポーツを再度活性化するちょうどいいタイミング。

——UNIVASが設立された背景には、どのようなことがあるのでしょうか。

鎌田　大学スポーツが日本のアマチュアスポーツを支え、けん引してきたことは間違いありませんが、一時期に比べると影響力が低下してきたことも否定できません。トップ選手のプロ化やレジャーの多様化などの社会的要因もありますが、大学においては体育実技が必修ではなくなり、一般の学生と体育会に所属する学生の二極化が進んできたことも原因に挙げられるでしょう。

こうした状況にあって、大学全体が今後どのようにスポーツに取り組んでいくか、日本のスポーツをもっと発展させるために大学がどう関わっていくかが大きな問題として認識されています。

一方、スポーツに関わる不祥事が社会問題になりましたが、体育会や学内のサークルに対する大学の責任については不明確なままとなっています。

これに対して、米国のNCAA（National Collegiate Athletic Association：全米大学体育協会）は非常に大きな収益を上げ、それを収益の上がらない種目あるいは大学に配分することによって大学全体のスポーツ環境を整備し、スポーツを盛り上げる役割を果たしています。

こうした事例を参考にしながら、日本の大学スポーツを再度活性化するために、いまはちょうどいいタイミングではないかと思います。

——お話をうかがっていて、大学スポーツの対象が四つに分類できると思いました。まず、五輪レベルのトップアスリート。次に、対抗戦などを行っている体育会所属のスポーツ競技者。以前のカリキュラムにあった教養体育の経験者。そして、普段はスポーツに縁のない一般の学生。また、スポーツサークルも活発に活動していますが、UNIVASはどのあたりをカバーしようとしているのでしょうか。

鎌田　基本的には、それら全てを包摂したいと考えています。プレーする学生だけではなく、応援する学生もいてはじめて大学スポーツが盛り上がるので、幅広い層を取り込んでいきたい。UNIVASのスタート時点では主に体育会を対象にしていますが、順次広げていきたいと思います。

——「見るスポーツ」「語るスポーツ」など、いろいろな形があってこそ盛り上がっていくので、対象を広げることができるかどうかがUNIVASにとって大事ではないかと思います。

鎌田　そうしないと、学生や大学が当事者意識を持てないおそれがあります。

——UNIVASはどういったゴールを設定し、どのようなスケジュールで進めようとなさっているのでしょうか。

鎌田　本日、具体的活動を始めるための臨時社員総会が開催されたのですが、体育会所属のアスリートを対象にスタートしました。これは、学生の安心安全を確保するスポーツ環境の整備という課題に対して、全学生および全てのスポーツを対象にすると際限がなくなるという問題

や、学生のスポーツ活動に対する広い意味でのガバナンスやコンプライアンスの問題などに対応するために、発足時点ではやむを得ないと判断したからです。

――まずは大学スポーツに関わるさまざまな課題を一つ一つ検討し、クリアにしていくことがUNIVASの責務であるということですね。

鎌田　ええ。さらに、学生の学びの問題があります。学生アスリートはプロではないので、学生の本分としての学問と、良き市民としての常識やマナーを身に付けなければなりません。こういう面もきちんとやっていく指針を示す、あるいは先駆的な大学の事例を紹介し、ほかの大学に広げていくような活動を通じて環境整備を進めたいと思います。学生のスポーツ活動に対して、大学がきちんと指導・援助する態勢を作るサポートをすることが第一の目標です。

――UNIVASでは「学業充実」「安心安全」「事業マーケティング」という3本柱を掲げていますが、まずは「安心安全」「学業充実」が最優先課題にならざるを得ないでしょうか。

鎌田　はい、NCAAのような積極的事業展開はまだ先の話になります。

あえて大学スポーツの全国組織を設立した意義とは。

――NCAAの最大のポイントは、もっとも人気のあるアメリカンフットボールからの収益をベースにして、全体の底上げを図っていることです。日本版NCAAといった場合、これに該当する部分はどう考えればよろしいでしょうか。

鎌田　各大学でスポーツ活動の歴史や考え方に違いがあり、日本と米国でも大学スポーツの成り立ちが異なります。日本では各競技団体や学連が主体となってそれぞれの競技を発展させてきた経緯があるので、当面は大学と競技団体・学連などが協調してやっていくほうが現実的だと思います。しかし、実質的に大学が主体となった組織にするためには、理事の少なくとも半数は大学代表が占めるようになる必要があるでしょう。これがいま、早急に解決しなければならない課題だと思います。

――中体連や高体連という全国組織は長年にわたって活動してきたものの、その限界について社会的な批判もあるようです。そうした中で、あえて大学スポーツの全国組織を設立した意義は何でしょうか。

鎌田　UNIVASには、いろいろな思いを持った人が集まっています。

例えば、中体連や高体連が主催する全国大会があるのに対して、大学にはそれがありません。インカレ（インターカレッジ）は各競技団体ごとの大会であるため、スポーツ全体を通して大学が力を競い合う風土が育っていません。そこで、「大体連」のようなものを設立して、インカレも大体連が主催するようにしたいという考えもあります。

国際的にはユニバーシアード競技大会があり、米国はNCAAが選考した選手が参加していますが、日本にはそうした組織がないため、現状ではJOC（日本

オリンピック委員会）が出場選手を選考しています。これをUNIVASが行うようにできないかという意見もあります。こうしたことでスポーツ全体における大学スポーツの位置付けが明確になるかもしれません。

学生が主役という発想に立ってサポートし、ガバナンスの問題を整備。

――既存の各競技団体には数十年、中には100年以上の歴史があるところもあります。その上でUNIVASを設立して、どんな活動をしていくのでしょうか。

鎌田　普段のトレーニングや学業との両立などに対する取り組みの度合いが競技団体によってだいぶ異なり、伝統的なやり方に固執して「タコツボ化」しているところもないとはいえません。それが、他の競技団体のやり方に触れることによって大きく改善される可能性があります。UNIVASの活動を通して各大学や競技団体が問題を共有し、大学スポーツの環境が改善されるのではないでしょうか。

――そうなれば、大学や競技団体の新たな加盟が促進されるでしょう。

鎌田　そうですね。加盟しているかどうかにかかわらず、幅広い大学の学長にお集まりいただいて、大学の立場からUNIVASのあるべき姿や現状への疑問などを率直に話し合う場を設けたいと考えています。

例えば、体育会所属の学生が正式な試合中にトラブルを起こした場合、基本的には、試合の中で競技ルールに従って処理します。大学としては、早稲田大学であれば体育会を統括する競技スポーツセンターが指導上の問題などに対応する。学生の行動が限度を超えたものであれば停学や退学が検討されますが、これは学部の問題です。また、指導する教員に問題があれば、所属学部の教授会や学校法人の理事会が対応する。こうしたガバナンスやコンプライアンスの原則があいまいだと、大学が社会に対して自信を持って対応し、情報を発信することが難しくなる可能性があるため、UNIVASできちんと議論して共通認識を持つことが必要だと考えています。

――学生スポーツで不祥事が発生した場合、課外活動だから最終的な責任は学生にあるという大学の主張は、もはや社会に通用しなくなっています。学生のサポートをしつつ、最終的には大学が責任を負う体制を構築するというお話ですが、それと大学の自治との関係をどうお考えでしょうか。

鎌田　これは重要で、難しい問題です。課外活動とはいえ、学生に活動の場を提供し、大学のブランド価値向上にも寄与

してもらっているにもかかわらず、何かあったら責任を学生だけに帰するのは、私は違うのではないかと思います。一方、学生に対する管理を厳しくすれば大学は責任を果たしたことになるというものでもないでしょう。

学生が自らの能力を主体的能動的に伸ばしていく基礎力を涵養することがスポーツにおける教育効果であるとしたら、学生が自由に活動しつつも則を超えないという自己規律ができなかった場合、教育上の責任は大学が負う。これは普段の授業でも、研究におけるデータねつ造などの問題でも同じ考え方だと思います。大学は学生の全人的な発展を支え、その自主的な活動に対する責任もきちんと引き受けていかなくてはならない。自由に活動しつつも社会規範の枠の中に収まるという構造は、研究活動もスポーツもそれほど変わらないと思います。

また、体育会に対する大学の管理・統制や体育会自体のマネジメントの問題は複雑で、外部にはOB会や学連、そこにさらにUNIVASが関係してくるとさらに錯綜するおそれはあります。しかし、学生が主役という発想に立ってサポートを行い、ガバナンス体制を整備するには、いいチャンスではないかと考えています。

——それは、社会的にも期待されていることだと思います。

スポーツだけ、なぜ一般学生とは別のルールが適用されるのか。

——UNIVASが掲げる「学業充実」についておうかがいします。例えば、NCAAでは年間の欠席が5回以上で試合の出場停止といった規定があるようですが、これをUNIVASが日本でも実施するためには、大学の自治などいろいろな問題があります。

鎌田　UNIVASが一つの基準を提示し、それを各大学の考え方に応じて修正し、適用すればいいのではないでしょうか。いくつかの大学では既に始まっていますが、まだルールが緩いという声もあるようです。

——スポーツだけ、なぜ一般学生とは別のルールが適用されるのかという疑問の声も聞かれます。

鎌田　現状では大学や学部によって異なっていますが、大学全体あるいは学生アスリートの社会的信用の向上といった観点から検討する必要があります。大学スポーツで活躍した人が、卒業後に立派な業績を上げたり経営者になって活躍するケースは少なくありません。大学スポーツに対する信頼の向上と、学生の全人格的な成長を図ることがこれからの課題だと認識しています。

学生は知識を増やすだけではなく、いろいろなものにチャレンジしていく力が

必要であり、そうした能力は教室の中だけで育成されるわけではありません。フィールドワークやスポーツなどを通して身に付け、それが学問と結び付くことで成長につながる。そういった雰囲気を大学全体が大事にして、スポーツに打ち込んだ学生の社会的評価を高めていく必要があると思います。

スポーツをする学生と一般の学生の日常的な接点がなくなっている。

——本来、優れた思考力や判断力がないとトップアスリートにはなれません。学習とスポーツを両立させる「文武両道」について、どのようなイメージをお持ちですか。

鎌田　トップアスリートにも向学心の強い学生は多いのですが、時間の制約で一定の限界があります。プロを目指す学生だけではなく、卒業後はいろいろな道に進んで成果を上げる。そういう人たちが10年後に経営者や学者になり、また一緒になって何か新しいことを始めるといったような環境を整えていくといいのではないでしょうか。

——スポーツをやっている学生が特別授業を受けるのではなく、一般学生と机を並べて授業を受け、卒業するという文武両道のイメージが米国などにはあるように聞いています。日本は少し違うような気がしますが、いかがでしょうか。

鎌田　かつては、例えば六大学野球でも箱根駅伝でもラグビーの早明戦でも、さまざまな学部の学生が出場していましたが、現在はスポーツそのものが非常に専門化し、各大学ともトップアスリートの学生が特定の学部やキャンパスに集約される傾向があります。

また、入試の問題もあります。大学は多様な価値観や目的、文化的背景を持った学生が切磋琢磨する中で自己発見をしていく環境を整えなければなりませんが、ペーパーテストの結果がもっとも公平であるという考え方が一般化して、教室にいるのは均質な学生だけという傾向が強まっています。これを克服し、入学者の多様化を図るために、スポーツを通じて能力を発揮する学生も評価すべきだと思っています。スポーツをすることによって人間的に成長する、そういう学生を増やすことも重要な使命だと考えます。

——UNIVASがきっかけになって、大学の多様性が広がればいいですね。

鎌田　ロンドンオリンピックのあとに米国のUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）を訪れた際に、早稲田大学の学生や卒業生がたくさんのメダルを取ったと話したところ、うちの学生が取った金メダルは日本全体の金メダルより多いと言われました。米国の有力大学はスポーツも一流であり、そういう学生がキャンパスにいることによって、ほかの学生も刺激を受けて活躍するという効果があります。日本では、スポーツをしている学生は特別だと考えすぎる傾向が強まっているように思えて残念です。

特に都心の大学はスポーツ施設を郊外に移しつつあるので、スポーツをする学生と一般の学生の日常的な接点がなくなっています。人気のある種目の試合で

さえ、ピーク時に比べて観客数が半分近くにまで落ち込んでいる現状の中、クラスメートがスポーツで活躍しているからみんなで応援に行くという状況を復活させたいですね。

一方、先ほど出席の問題がありましたが、例えば五輪に出場するためには、昔と違って、国際ランキングの上位にいなければなりません。そうなると、国際大会で海外を転戦する学生は授業に出ることが困難になります。NCAAでは、ティーチングアシスタントのような人を学生の遠征先に派遣するようなことまでやっています。

——チューターがちゃんと付いていますね。

鎌田 日本なら、eラーニングの活用も考えられますね。

大学主体の団体として、学生全体にコミットしてもらえるように。

——現状では、UNIVASが体育会だけのためにあるようなイメージがあって、大学側は他人事のように考えている感じがあります。しかし、鎌田会長が最初におっしゃったように、最終的には学生全体にコミットしてもらえるようにしたいというのがUNIVASの総意であると理解してよろしいでしょうか。

鎌田 事業計画の中にも、そういったことを目標として載せていきます。また、設立の過程ではスポーツ庁や学連が主導的役割を果たしましたが、これを大学主体にしていく必要もあります。学生や教職員に、UNIVASは自分たちの団体だと思ってもらえるようにしていくことが一番重要です。

——そういうメッセージがもっと大学側に伝わると、UNIVASに対する考え方も変わっていくでしょう。UNIVASと企業の関係はいかがですか。

鎌田 UNIVAS会員の年会費は10万円に過ぎないので、企業からの寄付は非常に重要です。今後、大口のスポンサーも期待できますが、現在の財政状況では思い切った活動は困難でしょう。

いま、大学スポーツに企業がスポンサーとして関わったり、個人競技では学生である選手が企業を所属先にしたりしています。将来、UNIVASが主催する試合やキャンペーン活動にスポンサーがついた場合、それらとバッティングする可能性も想定されます。日本ではエンターテインメント法やスポーツ法、プロダクション契約に係る理論と実務があまり発

達していないので、難しい問題が生じるでしょう。それに対して、UNIVASや大学が総力を挙げて取り組めば課題もクリアになるし、学生自体もそれらをきちんと処理する経験を積むことができます。

競技場建設になぜ自治体が費用を出すのか、スポーツ団体に公的資金を支出していいのかといった問題も、大学スポーツを軸にして考えることができます。病院や福祉施設は公的サービスだから当然であり、スポーツは違うという感覚もありますが、法的・政策的に詰めて考える必要があります。このような検討を深めることで、スポーツ法の面から諸問題に取り組む研究者や実務家が増える環境が整備されるという期待もあります。

大学スポーツの振興は教育の多様化や若者層の活性化にも貢献。

――大学スポーツの振興が社会を変える、つまり大学がスポーツを振興することが社会的な意義を持ち、社会全体がそれに共感し合意することがUNIVASの最終的な目標ではないかと思います。大学スポーツを振興する意義について、メッセージをいただけますでしょうか。

鎌田　日本の近代化を促進した要素の一つに近代スポーツの導入があり、スポーツそのものと共に、それを支える近代的な考え方やルールに対する意識が高まり、広まりました。その先頭に立っていたのが大学スポーツでした。戦後復興期にも、市民がスポーツに触れることで健康を増進し、社会を明るくするといった役割を果たしました。オリンピックやパラリンピックを支えている選手のかなりの部分は大学生アスリートです。そうした大学スポーツが果たす役割を、もっともっと発展させていきたいと考えています。

将来、国家の代表になれそうな選手だけには徹底的にスポーツをやらせて、それ以外の大部分の国民はスポーツに一切関わらないという国もあり、日本もそれに近づきつつあるように感じます。しかし、自分でプレーするだけではなく、選手や地元チームを応援したり、スポーツ新聞を作ったり、動画を配信することもスポーツへの関わりであるといえます。こうしたことを大学全体の動きにするために、大学スポーツの活性化を願う大学代表者にたくさんお集まりいただき、大学としてのスポーツ政策を発展させていただきたいと願っています。

大学スポーツの振興は教育の多様化や若者層の活性化という面でも意味があるものですので、UNIVASがそうした役割を担っていきたいと願っています。

――戦前は教練としての体育があり、戦後は半世紀以上かかって、生涯学習としてのスポーツが定着しつつあります。では、その次はどうなるとお考えですか。

鎌田　スポーツが発展する余地はまだたくさんあると思います。社会環境として、人々がスポーツに親しむ機会が激減している中で、「見るスポーツ」ももっと広まるといいですね。せっかく作ったUNIVASなので、国民全体の関心を高めることのできる面白い活動を展開していきたいと考えています。